

西真寺通信

令和五年春号 発行 西真寺

●『仏説無量寿経』より
汝自ら当に知るべし

令和四年は、西真寺にとって節目の年になりました。住職継職奉告法要ならびに前住職前坊守七回忌法要を修行させて頂き、当山の将来の展望を映し出す過程でもありました。

また、村上門徒会同朋の会主催の聞法会を、当山にて連続五回に渡り講話を実践、取次寺、宗派を超えた求道活動をさせて頂く年でもありました。

浄土真宗の教義を分かりやすく表現し、伝えるという実践が、いかに難題であり、自分自身の教義理解を徹底して問われる日々を過ごしました。

令和四年は、はまなす墓苑の新しいご縁も増える一方で、奉告法要の準備、手配、習礼等、法事や葬儀も重なり、体調が悪化、何度も検査の為、新潟大学病院に通う不安な日々でもありました。

さて、表題の「汝自らを当に知るべし」という言葉は、『仏説無量寿経』に出てくる、世自在王仏（せじざいおうぶつ）が法蔵菩薩（ほろうぞうぼさつ）に言った言葉で、私が一番重要に受け止めている「お経の言葉」であります。

法蔵菩薩が、世自在王仏に対して、「悟りを得る為にどうか私に広く教えを説いてください。その教えに従って修行します」という願いに対する世自在王仏の答えが「汝自当知」でした。

「あなた自身を知って往きなさい」という態度は、「自力で何とかする問題です」という意味ではありません。自分が求めている世界とは、「内なる自己」によって開かれ、生まれて往くという意味で領解しています。

を辿らなければならないのです。それが真実を辿る道であり、主体的に生きる道筋です。

世自在王仏には、現代社会でも通じる臨床心理士、カウンセラーの態度があると思います。

私は、この一年僧侶としての本分（何に向き合えばよいのか）を徹底して内なる自己に問い続け、自覚しなければならぬ御縁を頂きました。自らの浅はかさを知る重要さに気づかされたのです。

カウンセラーの態度には、助言は一切しない姿勢があります。人に言われて行動したところで、その人本来の生き方など、見つけられるはずがありません。答えは既にその人自身の心の深淵にあるからです。

仏教の教えは、道徳では無く倫理でもなく、「善悪の彼岸」（ニーチェ）にあります。常に本当の私自身を問うという姿勢を生み、自分で考え主体性を育むはたらきを示しているだけです。

仏教の教えとは、その通りにしてくださいと強制するものではありません。様々な苦しみの根底に潜む自己の闇や影を認め生きて往けるようになるには、自分自身が自分に成る過程

客体（他人）に答えを求めることよりも主体（自分）を問う姿勢を促す態度こそが、世自在王仏すなわち仏法の存在意義です。

鉄砲は人を殺すが、
仏法は人を生かす（高光大船）

「私は神さまも信じていますが、それではいけないのですか」⑩
—親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争—

4. 親鸞聖人の神祇不拝

孔子の、「人に仕えることとはできない、鬼神に仕えることなど出来るはずがない」という思想に深く共感の念を持った親鸞の考えは、先に紹介した為政者が人格化した人間神や観念神を対象とするものであって、決して日本が本来持っていた自然に対する畏敬の念のことではないのです。

現代の政治家の中では、「日本は神の国である」とか、「やおろずの神は日本古来ゆかしき自然の神であり、日本人の体に染み付く神であるから政教分離の原則は相当しない」などと安直に考えています。

権力者が民衆に刷り込んだ神像を利用した政教分離の問題

は、単純ではなく、政治家が宗教に対して、如何に思慮深さが足りないか、が理解できません。

親鸞は越後に流罪になり、権力によって身体は拘束され、俗人 藤井善信（ふじいよしざね）として半奴隷のように拘束されましたが、「内なる信心」「自由なる心」までは奪われていなかったのです。なぜなら、天皇から姓名を与えられたにもかかわらず、「非僧非俗」の愚禿と名告ったからです。愚禿とは阿弥陀仏から呼ばれた名前なのです。

親鸞が論語の一節を引用したのは、奴隷の哲学者エピクテタスと同じ境遇であり、同じ想いが巡らされたのだと思います。人間は人間を支配したがりますが、人間は人間の心までは支配できない事は明らかです。

親鸞は仏教者として、求道者として阿弥陀仏一仏のみの帰依を立脚地としました。

もとより日本の神は、仏法の守護者としてその存在が保証されており、仏ぬきに神の地位がありえない思想体系の中では当然のことでしょう。親鸞には、神祇の呪縛は無く、仏法を支援する側に帰依すること自体本末転倒でした。

親鸞は、阿弥陀仏一仏以外を対象とする礼拝は徹底して否定しており、権力者が、恣意的に創造した神々に対し礼拝する人々の行為全体について、否定するつもりは全くなかったと考えられます。人心を掌握する為、人間を人格化する行為に携わった支配者、権力者を徹底的に否定していたのです。

念仏者は、占いやおまじない、日にちや方角の吉凶を選ばず、迷信に束縛され翻弄される生き方をする必要はないのです。親鸞は、神に祈る必要もなく、崇りを恐れることもない主体的な生き方が出来るということをお我々に問いかけていたのです。

阿弥陀仏は色も形も無いはたらきそのものであります。そのはたらきによって救われた親鸞は、「念仏者は、無礙の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし」(『歎異抄』)と自己の立脚地を述べています。

次に親鸞が救われた如来のはたらきと、神と人間の関係について考察します。

5. 人間と神の関係

ニーチェは、「神は死んだ」と言い残しました。ニーチェは自身を西洋のブツダと名乗り、西洋は仏教が伝わる程成熟していないという程、仏教を理解していません。一方で、これ迄のキリスト教の道徳的価値観を否定し、魂も体も消滅して「無」(虚無)になりこの世に還ることを、「永劫回帰」として語りました。

ユング派の林道義は、錬金術（卑金属を貴金属に変え、不老不死を得る賢者の石を得る術）における作業プロセスを例に、人間と神の関係を次のように論じています。

『昇天』とは人間が神になるこ

とであり、グノーシス主義では人間がプレローマ界に帰ること（中略）キリスト経の『マリア昇天』も心理学的には同様の意味を持つのである。つまり『魂の上昇』とは魂が神になることを意味しており、仏教では『往相』に当たる。（中略）その夜明けの清純な空気の中を、天に行っていた魂が帰ってくる。『魂の帰還』である。これは心理学的には神が人間になることを意味している。仏教では『往相』に対する『還相』に当たる段階であり、『十牛図』では、人間界に帰ってくる最後の図で示される」（下線は筆者）

グノーシス派とは、キリスト教の派で、極端な霊肉二元論を持ち禁欲主義に特徴があります。この

グノーシス派から派生したマニ教は、仏教の影響を受けた宗教です。中国でマニ教が浄土教に吸収されたことから、間接的にグノーシス派と仏教とが比較されることは宗教学では自然なことです。

この林道義の説明は、宗教学や心理学の専門用語が多く難解ではありますが、重要な点に限れば、

人間が神になるⅡ「往相」

神が人間になるⅡ「還相」

という説明がされています。

宗教学の視点で言えば、神道の特徴は、共同的社会集団の日本にしか通用しない宗教であり、権力者、つまり「人間の神化」Ⅱ「往相」が指摘できます。

ところが、仏教には「往相」

と「還相」のはたらきがあるように「人間の神化」の相を経て「神の人間化」という過程があるという事になります。神道と仏教の違いがここで理解できる

と思います。ニーチェの魂と体がうから、こちらを見る視線を併せ滅びて「無」の状態が帰る「永劫持つてことだ」というふうには「還相」の思想も宗教学的に観ればは考えています。こちらからの視点と、向こうからの視線、その両方の視線を行使して初めて、物事

浄土教の教義では、凡夫が穢土から浄土に往生する姿、浄土に生けです」と説き、往還回向を次のまれば菩薩となる相を「往相」と言います。対して、菩薩が浄土から穢土に還る、弥陀の本願を伝える為に娑婆に還り衆生を救う相を「還相」としました。

往相…現実から観る視点

還相…未来から観る視点

往相+還相Ⅱ生死一如、全体性

親鸞に影響を受けた吉本隆明 ところが、浄土教の還相には、は、「親鸞が曇鸞の『浄土論註』に吉本が言う「今の私」に対して「現ならつて（往相）」と（還相）」を説生」にはたらく還相と、「私の死くとき、ある意味で生から死の方向後」、二次元にはたらく還相といへ生き続けることを（往相）、生きう両方の解釈があるのです。

つづけながら死からの眺望を獲得することを（還相）と読みかえることができる」と、あくまでも「今る「即得往生 住不退転」の「即」の私」の視点を述べています。

得れば現生に往生し、正定聚の位

また吉本は、「親鸞が還相ということでは「即時」「今」を示し、信心を

また吉本は、「親鸞が還相ということでは「即時」「今」を示し、信心を

また吉本は、「親鸞が還相ということでは「即時」「今」を示し、信心を

また吉本は、「親鸞が還相ということでは「即時」「今」を示し、信心を

また吉本は、「親鸞が還相ということでは「即時」「今」を示し、信心を

この「回向」とは、差し向ける、識を転ずる、形を変えて現れるという意味があり、阿弥陀仏から差し向けられた菩薩が促すはたらきを示します。

往還回向という他方は、「今の私」に信心をもたらしますので、即得往生の「即」には、「今の私」と「菩薩」とが同じ位（正定聚）になることを示しています。

この「菩薩」と「今の私」にある「即位」関係には、主客を超えた一体性があります。一方、死後に菩薩になる説には、「今の私」と「菩薩」には、結び目（即）が無く、「今の私」は傍観者です。この還相に対する疑問を吉本は、「未来からの視線」「死からの眺望を獲得する」として、主体である「今の私」、つまり「現生」に起こる還相であると主張したのです。

還相（神の人間化）について、現生往生の説であれば、信心の

はたらきにより「今の私」を補い、新たな気付きを与え、立脚地を定めます。それは如来の「はたらき」であり、その往復の相による変化は、本質的に現生でも主体的な目覚めをもたらすこととして説明出来ます。

また、『大無量寿経』にある「汝自知」（あなた自身で知って往きなさい）も現生における還相であればこそ、今の自分を省みる過程が成立するのです。

長谷正當は、「浄土はあくまでも現世を超越している。しかし、その超越的浄土は未来から現在のわれわれのもとに到来して来ている。それを感得する場を現生とするのである」と論じています。感得とは、真理を感じ悟ることを意味し、長谷は、吉本の還相論を踏襲しています。

「今の私」が感得することとは、精神的な死（自我崩壊）、すなわち自力無功、吉本の言う「死からの眺望を獲得する」過程を感得することにより、自己が明

らかにされ、本当の自己を知り得る世界が、もたらせられます。

長谷の示した「現世」とは、前世、現世、来世、三世のうちの「現世」で往生成仏が完結するあり様です。この「現世」往生は、即身成仏を指し、一方の「現生」とは、三世を貫通包括する世界観を意味します。

「現世」往生では、「菩薩」の救いが、別世界に存在するだけで、私と相互につながり遇う一体性が欠け、乖離しています。

たとえ「今の私」が死後の世界で救済されても、「今の私」が救われていなければ、死後世界につながりは無く、不安なままです。

「今の私」が「現生」に往生しなければ、真実を感得できる場が生まれ無く、死後の成仏に繋がらないのです。往生を死後の世界に先送りするような生き方（現生世界）では、還相自体の意味は成立せず、還相の菩薩は、単なる夢物語のままになるでしょう。

親鸞の言説に、「浄土の真宗は

証道今盛んなり。（中略）これ専念証業の徳也、これ決定往生の徴なり」（『教行信証』「後序」）とあり、故 安富信哉先生が指摘する通り、「今」と現在形を指しています。安富先生は、「往生を時の点として見るだけでなく、証道というように連続的な道、あるいは『線』として見ることが出来る」と「今の私」とのつながりを説明しています。

「証道」とは、本願により浄土に往生し、悟りを得る道を指し、その道が「共に」往生すべき身の世界として開かれると安富先生は示して下さったのです。

長谷正當も同様に「現生往生とは、如来によって回向された往生の道を、現生において一歩一歩歩むことである。親鸞は信に始まり、究極において「臨終の一念の夕べ大般涅槃を超証する」に至るとして、その道を歩むことを『難思議往生』と捉えた」と親鸞の根本思想として述べられています。（次号に続く）